〈研究ノート〉

保育実習での経験が幼稚園実習の学びに与える影響について

大　内　善　広

【要旨】

本研究は、幼稚園での実習に際して、その前段階に行われる保育実習での経験による影響について検討することを目的としている。特に選択必修としての保育実習である保育実習Ⅲ（保育所実習）と保育実習Ⅳ（施設実習）の選択はどのような理由によって行われているのか、その選択によって幼稚園実習での経験にどのような違いが見られるのかについて検討した。その結果、保育実習Ⅲを選択した学生は、保育所や幼稚園への就職志望を持ち、1 回目の保育実習でポジティブな経験をし、保育実習Ⅲの経験が幼稚園実習での事前学習や責任実習に良い影響を与えていたことが示された。また、幼稚園実習効力感に関しても、高い傾向が見られた。最後に、選択必修の保育実習の選択の在り方について議論された。

キーワード：保育実習、幼稚園実習、選択必修の保育実習の選択、幼稚園実習効力感

１．目　的

近年の幼保一体化の流れの中で、幼児教育や保育の専門職を育成する教育機関では、幼稚園教諭の免許と保育士の資格の両方が取得可能なカリキュラムを設定している所が増加している。特に幼保連携型認定こども園における保育教諭は、幼稚園教諭免許と保育士資格の両方を持つことが原則となっており、保育・幼児教育への就職を考えている学生にとって、両方の免許・資格を取得することの重要性が高まっている。本学福祉総合学部子ども福祉コースにおいても、幼稚園教諭の免許と保育士の資格の両方が取得できるようにカリキュラムを設定している。

幼稚園教諭のカリキュラムについては、教育職員免許法、教育職員免許法施行規則などによって規定され、日本国憲法、体育、外国語コミュニケーション、情報機器に関する科目の他、教科に関する科目、教職に関する科目、教科又は教職に関する科目について所定の単位を取得することによって、教育機関卒業時に免許を取得することができる。なお、教育実習は教職に関する科目に含まれている。また、保育士のカリキュラムについては、保育の本質・目的に関する科目、保育の対象の理解に関する科目、保育の内容・方法に関する科目、保育の表現技術および保育実習について所定の単位を取得することによって、教育機関卒業時に

資格を取得することができる。

このような幼児教育・保育の専門家を育成するカリキュラムについて、幼稚園教諭と保育士でカリキュラムが重なる部分も多いが、それぞれの中核となる科目は幼稚園実習（教育実習）や保育実習であると考えられる。幼稚園実習は事前事後指導も含めて 5 単位以上の実施が要件となっており、本学においては 4 週間程度の実習期間を設定している。また、保育実習に関しては、「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」（厚生労働省, 2013）に、保育実習Ⅰがおおむね 20 日間、選択必修である保育実習ⅡとⅢがそれぞれ 10 日間という実習期間が示されている。保育実習Ⅰでは、保育所と保育所以外の福祉施設でそれぞれ実習を実施し、保育実習Ⅱでは保育所、保育実習Ⅲでは保育所以外の福祉施設において実習が実施される。本学においては、保育実習Ⅰについて、保育所での実習を保育実習Ⅰ、福祉施設での実習を保育実習Ⅱと分けており、選択必修の保育実習ⅡとⅢとそれぞれ保育実習Ⅲ、保育実習Ⅳとして扱っている。

以上のような実習状況をまとめると、幼稚園教諭の免許と保育士資格の両方を取得する学生が行う実習は、選択必修の保育実習の選択によって 2 通りに分かれる。一方は、保育所での実習を 2 回、保育所以外の福祉施設での実習を 1 回、幼稚園実習を 1 回行う学生である。もう一方は、保育所での実習を 1 回、保育所以外の福祉施設での実習を 2 回、幼稚園実習を 1 回行う学生である。なお、本学においては、2 年次に 1 回目の保育所実習を行い、3 年次に 1 回目の保育所以外の福祉施設での実習と選択必修の保育実習を行い､4 年次に幼稚園実習を行うようになっている。

実習が幼児教育・保育の専門家を目指す学生に与える教育効果について、例えば、小薗江（2014）は保育士資格のみを取得するために 6 週間の実習を実施する学生と、幼稚園教諭の免許と保育士資格の両方を取得するために 10 週間の実習を実施する学生間で比較を行い､保育実習効力感（小薗江, 2009）について保育現場で初めて実践行動をして身に付くと考えられる保育のスキルに近い部分において実習回数が自己効力感を高めることを示している。

なお､保育実習効力感とは､Bandura（1977）で提唱されている「課題の遂行可能性の認知」である自己効力感の概念を保育実習に援用したものである。Bandura（1977）は自己効力感の高さが後のパフォーマンスを規定することを指摘しており、保育実習効力感の高さは、うまく保育実習を行うことができることをある程度予想しうると考えられる。また、保育実習効力感は、三木・桜井（1998）が提唱している「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」である保育者効力感とも相関が高いことが示されており（小薗江, 2009）、実習を通して保育実習効力感を高めることは、幼児教育・保育現場での適応に良い影響を与えることが考えられる。

先述の小薗江（2014）の研究では、実習期間の効果について示されているが、選択必修の保育実習の選択の効果について触れられていない。本学の場合、最後の実習である幼稚園実習の前に、保育所か保育所以外の福祉施設のどちらで実習を行うのか選択する機会がある。

Bandura（1977）は、自己効力感について一般性の次元について指摘しており、保育所での実習経験は幼稚園での実習に強く影響を与えうることが考えられる。その一方で、保育所以外の福祉施設での実習においても、保育所での実習では学べないことが存在すると考えられるため、その経験が幼稚園実習に影響を与えることも想定できる。

そこで、本研究では、この選択必修の保育実習の選択が、最後の実習である幼稚園実習に与える影響について検討する。選択必修の保育実習の選択が幼稚園実習に与える影響について検討することにより、学生が目指すキャリアに応じて実習を選択する際の指針が得られることが期待でき、また、教員側の実習指導においても、選択必修の保育実習の選択による経験の違いを踏まえた実習指導を行うための資料としても活用しうると考えられる。

２．方　法

２．１　調査計画

選択必修の保育実習での選択や保育実習・幼稚園実習での学びなどの関係を検討するために、「教育実習（事前及び事後指導を含む）」の科目を履修している大学 4 年生 12 名（男性 3 名、女性 9 名）を対象に質問紙調査を行った。調査は 10 月の「教育実習（事前及び事後指導を含む）」の授業内で行われた。回答時間は 10 分程度であった。なお、幼稚園での実習は 6 月に実施しているため、幼稚園実習終了後の調査となっている。被調査者の年齢は 21.58 歳（SD=0.51）であった。

２．２　測定尺度

選択必修の保育実習の選択　選択必修の保育実習である保育実習Ⅲ（保育所）・保育実習Ⅳ（施設）のどちらを履修したのかについて尋ねた上で、その選択の理由について 12 個の理由を用意し、あてはまるもの全てに○をつけるように回答を求めた。なお、挙げられている理由以外の理由があった場合、自由記述にて回答を求めた。また、志望就職先が選択理由に影響していることが考えられたため、志望就職先についても 7 個の選択肢を用意し、あてはまるもの全てに○をつけるように回答を求めた。

保育実習Ⅰでの経験　1 回目の保育所での実習である保育実習Ⅰにおける経験や学びについて尋ねた。質問項目は 9 項目用意し、それぞれ「5：そう思う」から「1：そう思わない」の 5 件法にて回答を求めた。

幼稚園実習での経験　幼稚園実習における経験や学びについて、および、保育実習Ⅲまたは保育実習Ⅳでの経験が幼稚園実習で役立ったかどうかについて尋ねた。質問項目は、幼稚園実習での経験や学びについて 10 項目、保育実習Ⅲ/Ⅳでの経験の活用状況について 10 項目用意し、それぞれ「5：そう思う」から「1：そう思わない」の 5 件法にて回答を求めた。なお、保育実習Ⅲ/Ⅳでの経験の活用状況について、用意した項目以外のものがあった場合には、自

由記述にて回答を求めた。

幼稚園実習効力感尺度　小薗江（2009）の保育実習自己効力感尺度を参考に、再度実習を行うことになった場面を想定して回答する形で作成した。この尺度は 28 項目の質問で構成され、「積極的な実習態度（8 項目）」「ストレス対処（5 項目）」「事前準備（5 項目）」「保護者との関わり（3 項目）」「環境や教材の工夫（4 項目）」「子どもとの関わり（3 項目）」といった、小薗江（2009）と同様の 6 因子を想定した。「5：そう思う」から「1：そう思わない」の 5 件法にて回答を求めた。

２．３　倫理的配慮

本調査の実施に際し、回答者個人を特定しないこと、回答が成績に影響しないこと、データは全て統計的に処理することを周知した。また、収集したデータについては、細心の注意を払い管理を行っている。

３．結　果

３．１　選択必修の保育実習の選択

12 名の学生のうち、保育実習Ⅲを選択した学生は 8 名、保育実習Ⅳを選択した学生は 4 名であった。選択必修の保育実習の選択理由については、表 1 の通りであった。なお、自由記述での回答は無かった。

表 1　保育実習Ⅲ/Ⅳの選択理由（複数回答）

	全体 （N=12）	保育実習Ⅲ （n=8）	保育実習Ⅳ （n=4）
就職した時に役立つと思ったから	10（83.3%）	7（87.5%）	3（75.0%）
（保育所／施設）について，もっと学びたかったから	7（58.3%）	5（62.5%）	2（50.0%）
（保育所／施設）について，興味があったから	4（33.3%）	2（25.0%）	2（50.0%）
様々なことを広く学びたかったから	5（41.7%）	3（37.5%）	2（50.0%）
幼稚園実習に役立つと思ったから	2（16.7%）	2（25.0%）	0（0.0%）
保育実習Ⅰが大変だったから	0（0.0%）	0（0.0%）	0（0.0%）
保育実習Ⅰが楽しかったから	0（0.0%）	0（0.0%）	0（0.0%）
保育実習Ⅰで課題が残ったから	5（41.7%）	5（62.5%）	0（0.0%）
障がい児・者について学びたかったから	3（25.0%）	0（0.0%）	3（75.0%）
単位を取りやすそうだったから	0（0.0%）	0（0.0%）	0（0.0%）
友達が履修するから	0（0.0%）	0（0.0%）	0（0.0%）
特になにも考えずに，なんとなく良さそうだと思ったから	0（0.0%）	0（0.0%）	0（0.0%）

保育実習Ⅲと保育実習Ⅳの選択理由の中で大きく異なった項目について見てみると、保育実習Ⅲを選択した学生は選択理由について「保育実習Ⅰで課題が残ったから」を多く挙げている一方、保育実習Ⅳを選択した学生は選択理由について「障がい児・者について学びたかったから」を挙げている。

また、「幼稚園実習に役立つと思ったから」という項目については、保育実習Ⅲを選択した学生の中に若干理由として挙げた学生が見られたものの、全体的にはあまり保育実習の選択理由としては考えられていなかった。

全体としては、保育実習の選択に対して、「保育実習Ⅰが大変だったから」「保育実習Ⅰが楽しかったから」「単位を取りやすそうだったから」「友達が履修するから」「特になにも考えずに、なんとなく良さそうだと思ったから」といった理由を挙げた学生はいなかった。また、保育実習Ⅲと保育実習Ⅳの選択に関わらず、選択した理由として、「（保育所／施設）について、もっと学びたかったから」「（保育所／施設）について、興味があったから」「様々なことを広く学びたかったから」といった理由が挙げられ、特に「就職した時に役立つと思ったから」を理由として挙げる学生が多かった。なお、志望就職先は表 2 の通りであり、保育実習Ⅲを選択した学生は幼稚園や保育所を志望し、保育実習Ⅳを選択した学生は様々な就職先を選択していた。

表 2　志望就職先（複数回答）

	全体 （N=12）	保育実習Ⅲ （n=8）	保育実習Ⅳ （n=4）
幼稚園	8（66.7%）	7（87.5%）	1（25.0%）
保育所	6（50.0%）	5（62.5%）	1（25.0%）
認定こども園	0（0.0%）	0（0.0%）	0（0.0%）
保育所以外の児童福祉施設	2（16.7%）	0（0.0%）	2（50.0%）
児童福祉施設以外の施設	1（8.3%）	0（0.0%）	1（25.0%）
一般企業	1（8.3%）	0（0.0%）	1（25.0%）
その他	0（0.0%）	0（0.0%）	0（0.0%）

３．２　保育実習Ⅰでの経験

保育実習Ⅰでの経験や学びについて、選択必修の保育実習の選択別に各質問項目の得点の平均値・標準偏差を算出したところ、表 3 のような結果が得られた。

表 3　保育実習Ｉでの経験の平均・標準偏差

	全体 (N=12)	保育実習Ⅲ (n=8)	保育実習Ⅳ (n=4)	Ⅲ−Ⅳ
積極的に実習に取り組めた	3.92 (1.00)	4.13 (0.83)	3.50 (1.29)	0.63
保育所や保育士の役割についてよく学ぶことができた	3.75 (0.75)	4.13 (0.35)	3.00 (0.82)	1.13
子どもについてよく学ぶことができた	3.58 (0.90)	3.88 (0.83)	3.00 (0.82)	0.88
実習は楽しかった	3.67 (1.56)	4.38 (1.19)	2.25 (1.26)	2.13
実習はうまくいった	2.75 (1.14)	3.38 (0.74)	1.50 (0.58)	1.88
厳しい指導により大変な思いをした	3.00 (1.13)	2.88 (0.99)	3.25 (1.50)	−0.38
精神的に落ち込んだ	2.67 (1.23)	2.63 (1.19)	2.75 (1.50)	−0.13
保育所に対する興味が高まった	3.42 (1.38)	4.00 (0.93)	2.25 (1.50)	1.75
保育所で就職したいと思った	2.67 (0.98)	3.00 (0.53)	2.00 (1.41)	1.00

※括弧内は標準偏差を示す

保育実習Ⅳを選択した学生と比べて、保育実習Ⅲを選択した学生の方が、保育実習Ｉにおいてポジティブな経験をしている傾向が見られた。「保育所や保育士の役割についてよく学ぶことができた」「実習は楽しかった」「実習はうまくいった」「保育所に対する興味が高まった」「保育所で就職したいと思った」の項目については 1.00 ポイント以上の差が見られ、特に、「実習は楽しかった」については、2.13 ポイントの差が見られた。このことから、保育実習Ｉでの経験が、選択必修の保育実習の選択と関係があることがうかがわれた。

３．３　幼稚園実習での経験

幼稚園実習での経験や学びについて、選択必修の保育実習の選択別に各質問項目の得点の平均値・標準偏差を算出したところ、表 4 のような結果が得られた。

表 4　幼稚園実習での経験の平均・標準偏差

	全体 (N=12)	保育実習Ⅲ (n=8)	保育実習Ⅳ (n=4)	Ⅲ−Ⅳ
明確な目標を持って幼稚園実習に臨めた	4.25 (0.62)	4.38 (0.52)	4.00 (0.82)	0.38
よく事前学習をした上で幼稚園実習に臨めた	3.50 (0.67)	3.75 (0.46)	3.00 (0.82)	0.75
自信を持って幼稚園実習に臨めた	3.25 (0.75)	3.38 (0.74)	3.00 (0.82)	0.38
幼稚園実習に行く前は，実習への不安が強かった	4.08 (1.08)	4.00 (1.31)	4.25 (0.50)	−0.25
きちんと日誌を書くことができた	3.42 (0.90)	3.50 (0.93)	3.25 (0.96)	0.25
日誌を書くことは大変だった	4.00 (0.95)	3.88 (1.13)	4.25 (0.50)	−0.38
きちんと指導案を作成することができた	3.00 (1.21)	3.38 (1.06)	2.25 (1.26)	1.13
責任実習はうまくできた	3.08 (1.00)	3.50 (0.76)	2.25 (0.96)	1.25
子どもをよく観察して理解することができた	3.67 (0.65)	3.88 (0.64)	3.25 (0.50)	0.63
子どもの発達を踏まえて，子どもと関わることができた	3.33 (0.78)	3.63 (0.74)	2.75 (0.50)	0.88

※括弧内は標準偏差を示す

保育実習Ⅰでの経験や学びと同様に、保育実習Ⅳを選択した学生と比べて、保育実習Ⅲを選択した学生の方が、幼稚園実習においてポジティブな経験をしている傾向が見られた。「よく事前学習をした上で幼稚園実習に臨めた」「きちんと指導案を作成することができた」「責任実習はうまくできた」「子どもの発達を踏まえて、子どもと関わることができた」の項目については 0.75 ポイント以上の差が見られ、特に指導案や責任実習に関する項目について大きな差が見られた。このことから、保育実習Ⅲでの経験が幼稚園実習での経験や学びについて良い影響を与えていることが示唆された。

次に、選択必修の保育実習での経験の活用状況について、選択必修の保育実習の選択別に各質問項目の得点の平均値・標準偏差を算出したところ、表 5 のような結果が得られた。また、その他の活用状況として手遊びや絵本の読み聞かせ、紙芝居などの保育技術に関する自由記述の回答が 2 件得られた。

表 5　選択必修の保育実習での経験の活用状況の平均・標準偏差

	全体 (N=12)	保育実習Ⅲ (n=8)	保育実習Ⅳ (n=4)	Ⅲ−Ⅳ
実習の目標を立てること	4.17 (0.39)	4.25 (0.46)	4.00 (0.00)	0.25
事前学習に取り組むこと	3.92 (0.79)	4.25 (0.71)	3.25 (0.50)	1.00
幼稚園や先生の役割を理解すること	4.08 (0.79)	4.25 (0.89)	3.75 (0.50)	0.50
子どもを理解すること	4.17 (1.03)	4.25 (1.16)	4.00 (0.82)	0.25
日誌を書くこと	4.08 (0.79)	4.13 (0.99)	4.00 (0.00)	0.13
指導案を作成すること	4.08 (0.90)	4.13 (0.99)	4.00 (0.82)	0.13
部分・責任実習を行うこと	4.08 (0.90)	4.25 (0.89)	3.75 (0.96)	0.50
子どもに関わること	4.25 (0.97)	4.38 (1.06)	4.00 (0.82)	0.38
積極性を持って実習に取り組むこと	4.50 (0.80)	4.75 (0.71)	4.00 (0.82)	0.75
先生や職員の方とコミュニケーションを取ること	4.33 (1.07)	4.63 (1.06)	3.75 (0.96)	0.88

※括弧内は標準偏差を示す

こちらも、保育実習Ⅳを選択した学生と比べて、保育実習Ⅲを選択した学生の方が、選択必修の保育実習での経験が幼稚園実習に活かされている傾向が見られた。特に、「事前学習に取り組むこと」「積極性を持って実習に取り組むこと」「先生や職員の方とコミュニケーションを取ること」に 0.75 ポイント以上の差が見られた。ただし、保育実習Ⅳを選択した学生も含めて全体的に得点が高く、どちらの選択必修の保育実習を選択したのであれ、その経験が幼稚園実習に役立ったという実感を持てていることがうかがわれた。

３．４　幼稚園実習効力感

幼稚園実習効力感の各因子について、尺度得点に項目数を割った数値を因子の得点とした

上で、その平均値・標準偏差を算出したところ、表 6 のような結果が得られた。また、各因子の信頼性を検討するために、Cronbach の α 係数を算出したところ、「積極的な実習態度」が α=.824、「ストレス対処」が α=.886、「事前準備」が α=.729、「保護者との関わり」が α=.742、「環境や教材の工夫」が α=.731、「子どもとの関わり」が α=.882 となった。なお、各因子の項目および得点の平均値・標準偏差は表 7 の通りである。

表 6　幼稚園実習効力感の各因子の平均・標準偏差

	全体 (N=12)	保育実習Ⅲ (n=8)	保育実習Ⅳ (n=4)	Ⅲ−Ⅳ
積極的な実習態度	4.15 (0.43)	4.33 (0.28)	3.78 (0.47)	0.55
ストレス対処	3.50 (0.83)	3.83 (0.78)	2.85 (0.53)	0.98
事前準備	3.82 (0.56)	3.95 (0.54)	3.55 (0.57)	0.40
保護者との関わり	2.86 (0.48)	2.88 (0.43)	2.83 (0.64)	0.04
環境や教材の工夫	3.31 (0.57)	3.50 (0.53)	2.94 (0.47)	0.56
子どもとの関わり	3.78 (0.76)	3.96 (0.60)	3.42 (1.00)	0.54

※括弧内は標準偏差を示す

表 7　幼稚園実習効力感の各項目の平均・標準偏差

因子		全体 (N=12)	保育実習Ⅲ (n=8)	保育実習Ⅳ (n=4)	Ⅲ−Ⅳ
積極的な実習態度	アドバイスを確実に実行できる	3.58 (0.67)	3.75 (0.71)	3.25 (0.50)	0.50
	子どもの手本となる身のこなしができる	3.67 (0.65)	3.75 (0.71)	3.50 (0.58)	0.25
	身だしなみ・清潔感に気をつかうことができる	4.42 (0.67)	4.63 (0.52)	4.00 (0.82)	0.63
	子どもから学ぶ姿勢を持つことができる	4.33 (0.65)	4.50 (0.53)	4.00 (0.82)	0.50
	命を預かる責任感を持つことができる	4.42 (0.79)	4.75 (0.46)	3.75 (0.96)	1.00
	スキンシップを適切に行うことができる	4.25 (0.62)	4.50 (0.53)	3.75 (0.50)	0.75
	アドバイスを生かすことができる	4.42 (0.51)	4.63 (0.52)	4.00 (0.00)	0.63
	指導者の意図を理解することができる	4.08 (0.51)	4.13 (0.64)	4.00 (0.00)	0.13
ストレス対処	ストレス対処法をもっている	3.17 (1.27)	3.63 (1.30)	2.25 (0.50)	1.38
	気持ちの切り替えができる	3.50 (1.17)	3.88 (1.13)	2.75 (0.96)	1.13
	困難を前にして問題の本質を明確化できる	3.67 (0.65)	3.75 (0.71)	3.50 (0.58)	0.25
	自分で自己激励ができる	3.83 (0.94)	4.25 (0.89)	3.00 (0.00)	1.25
	精神的落ち込みに対する対処法をもっている	3.33 (0.89)	3.63 (0.74)	2.75 (0.96)	0.88
事前準備	実習園についての事前学習ができる	3.83 (0.83)	4.13 (0.64)	3.25 (0.96)	0.88
	子どもについての事前学習ができる	4.00 (0.85)	4.38 (0.52)	3.25 (0.96)	1.13
	環境整備・安全確認が十分できる	3.67 (0.78)	3.63 (0.92)	3.75 (0.50)	−0.13
	手遊びなどの演目・保育計画案の用意が十分できる	3.83 (0.83)	3.88 (0.83)	3.75 (0.96)	0.13
	児童の興味把握ができる	3.75 (0.75)	3.75 (0.71)	3.75 (0.96)	0.00
保護者との関わり	保護者と同じ視点に立って思考できる	3.00 (0.60)	3.00 (0.53)	3.00 (0.82)	0.00
	親子関係実態の読み取りができる	2.92 (0.51)	2.88 (0.35)	3.00 (0.82)	−0.13
	保護者の相談にのる力量がある	2.67 (0.65)	2.75 (0.71)	2.50 (0.58)	0.25
環境や教材の工夫	子どもにふさわしい活動や道具の工夫ができる	3.42 (0.67)	3.63 (0.74)	3.00 (0.00)	0.63
	身近な出来事を教材として生かせる	3.33 (0.89)	3.50 (0.93)	3.00 (0.82)	0.50
	玩具などの手作り工夫ができる	3.42 (0.79)	3.75 (0.71)	2.75 (0.50)	1.00
	教材を常日頃から蓄積・準備できる	3.08 (0.67)	3.13 (0.64)	3.00 (0.82)	0.13
子どもとの関わり	気配りに満ちた関わりができる	3.67 (0.78)	3.88 (0.64)	3.25 (0.96)	0.63
	子どもの意欲を引き出す言葉かけができる	3.50 (0.80)	3.63 (0.74)	3.25 (0.96)	0.38
	子どもに対する笑顔でのことばかけができる	4.17 (0.94)	4.38 (0.74)	3.75 (1.26)	0.63

※括弧内は標準偏差を示す

保育実習Ⅳを選択した学生と比べて、保育実習Ⅲを選択した学生の方が、全体的に幼稚園実習効力感が高い傾向が見られた。しかし、「保護者との関わり」因子に関しては、保育実習Ⅲを選択した学生と保育実習Ⅳを選択した学生の間で、ほとんど差は見られなかった。また、「ストレス対処」因子については差が最も大きく、0.98 ポイントの差が見られた。

４．考　察

本研究の結果から、選択必修の保育実習の選択の背景およびその選択が幼稚園実習に与える影響について考察する。

４．１　選択必修の保育実習の選択の背景について

まず、選択必修の保育実習の選択の背景であるが、全体的に就職を意識して選択している傾向が示された。特に、保育所での実習である保育実習Ⅲを選択した学生は、全員が志望就職先として保育所や幼稚園を挙げていた一方で、施設での実習である保育実習Ⅳを選択した学生は、志望就職先として施設を含む様々な就職先を考慮していたことからも、就職を意識した選択が行われている実態が明らかとなった。

また、「保育実習Ⅰが大変だったから」「単位を取りやすそうだったから」「友達が履修するから」「特になにも考えずに、なんとなく良さそうだと思ったから」などの、学習の目的とは関係のない理由で選択必修の保育実習の選択を行った学生はおらず、目的意識を持った選択が行われていることが示唆された。選択必修の保育実習の選択理由として、保育実習Ⅲを選択した学生が、「保育実習Ⅰで課題が残ったから」を多く挙げ、保育実習Ⅳを選択した学生が「障がい児・者について学びたかったから」を多く挙げていることからも、目的意識を持った選択が行われていることが示された。

さらに、「幼稚園実習に役立つと思ったから」という選択理由を挙げた学生が少なかったことから、あまり幼稚園実習との関連については意識されずに選択が行われている実態が示された。

次に、保育実習Ⅰでの経験との関連について考察する。保育実習Ⅳを選択した学生と比べて、保育実習Ⅲを選択した学生の方が、全体的に保育実習Ⅰにおける経験がポジティブである傾向が見られ、特に「実習は楽しかった」という質問項目において大きな差が見られたことから、保育実習Ⅰでの経験が選択必修の保育実習の選択に影響を与えている可能性が示されたと考えられる。

また、「厳しい指導により大変な思いをした」「精神的に落ち込んだ」といったネガティブな要因については、保育実習ⅢとⅣの選択の違いによる差があまり見られなかったことから、辛い思いをしたから保育所での実習を避けるといった回避的な目的での保育実習Ⅳの選択は行われていない実態が示された。

以上のことから、選択必修の保育実習の選択は、学生の目的意識に沿った形で行われ、特に保育実習Ⅰでのポジティブな経験が保育所や幼稚園での就職志望に繋がり、保育実習Ⅲを履修するという一連の流れが存在する可能性が示された。

４．２　選択必修の保育実習の選択が幼稚園実習に与える影響について

保育実習Ⅲを選択した学生と保育実習Ⅳを選択した学生の間で、幼稚園実習の学びについてどのような差が生じたのかについて検討する。保育実習Ⅳを選択した学生と比べて、保育実習Ⅲを選択した学生の方が、幼稚園実習での経験において、特に事前学習や責任実習について良好な状況と認識している傾向が見られた。このことは、保育実習Ⅲでの実習経験によって、幼児教育現場での実習にあたり、事前にどのような学習が必要なのかが明確になったためであることが考えられる。また、保育実習Ⅲの事前指導で行われる指導案に関する指導や、実習中の責任実習の経験が幼稚園実習の中で活かされたことが考えられる。このことは、選択必修の保育実習での経験の活用状況についての結果からも支持されていると判断できる。

子どもとの関わりに関しては、保育実習Ⅲを選択した学生は、幼稚園実習での経験において、子どもに関する理解や発達を踏まえた関わりができていたと回答していた。しかし、選択必修の保育実習での経験の活用状況においては、子どもの理解や子どもへの関わりについての項目にあまり差が見られなかった。一方で、積極性やコミュニケーションに大きな差が見られることから、保育実習Ⅲの中で実際に子ども達と積極的に関わる中で学んだことが、幼稚園実習での子どもの理解や関わりの差に繋がったのではないかと考えられる。

保育実習Ⅲを選択した学生と保育実習Ⅳを選択した学生の間であまり差が見られなかった点について着目すると、幼稚園実習での経験において、実習への自信や不安および実習日誌に関しては、選択必修の保育実習の選択による大きな違いは見られなかった。実習への自信や不安は全体的に他の得点よりも低い傾向があることから、幼稚園での実習が初めてのことであり、どのような実習になるのか不明な点が残されていたためであると考えられる。また、実習日誌に関しては、保育実習Ⅳでも日誌の記入は行っているため、学習が転移したものだと推察される。

次に、幼稚園実習効力感については、保育実習Ⅳを選択した学生と比べて、保育実習Ⅲを選択した学生の方が、特にストレス対処において高い効力感を持つ傾向が見られた一方で、保護者との関わりについてはほとんど差が見られなかった。ストレス対処については、保育現場の中に実習で入った経験の多さが影響しているものと考えられる。一方、保護者との関わりについては、実習の中で保護者と関わる経験を持ちにくいことが反映されていると思われる。

４．３　総合考察

保育実習Ⅲを選択した学生は、保育所や幼稚園への就職志望を持ち、1 回目の保育実習でポジティブな経験をし、保育実習Ⅲの経験が幼稚園実習での事前学習や責任実習に良い影響

を与えていたことが示された。一方、保育実習Ⅳを選択した学生は、幼稚園での学びや経験について相対的に得点が低い傾向が見られたが、実習への自信や不安、実習日誌など、あまり差が見られなかったものもあった。つまり、施設での実習の経験も、幼稚園での実習に活用されている部分もあることが示されたと考えられる。

本研究の結果は、保育実習や幼稚園実習に関して、以下のような示唆が含まれていると考えられる。第 1 に、早い時期からの就職指導の重要性である。選択必修の保育実習の選択は、学生は自身の就職志望先を意識した上で行われていることが本研究の結果から示された。しかし、実際に選択必修の保育実習の選択が行われるのは 2 年次の最後であり、その時点で就職志望先について具体化できていない学生も存在することが考えられる。選択必修の保育実習について保育所実習である保育実習Ⅲを選択すると幼稚園実習での学習や経験がポジティブなものになる傾向が見られるため、早い時期からの就職指導の重要性が示唆されたと考えられる。第 2 に、1 回目の保育実習での経験の重要性である。本研究の結果から、1 回目の保育実習である保育実習Ⅰでのポジティブな経験が最終的に幼稚園実習でのポジティブな学びや経験に繋がっている可能性や厳しい指導や精神的な落ち込みといったネガティブな経験は特に選択必修の保育実習の選択に影響していない可能性が示された。このことは、保育実習Ⅰでの経験や学びが、失敗したり厳しい指導を受けたりすることがあったとしても、最終的にポジティブに実習での経験を受けとめ、実りある実習を行うことの重要性を示していると考えられる。第 3 に、幼稚園実習の事前指導において重点的に指導すべきことに関する示唆である。特に保育実習Ⅳを選択した学生は、事前学習や指導案の作成、責任実習に関して低い得点が見られているため、その部分についてフォローアップするような事前指導を行う必要があろう。

５．本研究の問題と今後の展望

本研究における調査対象数は非常に少なく、統計的検定による差の検討を行うのに十分なデータ数が確保できていない。そのため今回の研究では、基本統計量から結果の解釈および考察を試みたが、頑健な結論を得るためには引き続き同様の調査を行い、交差妥当性について検討している必要がある。

次に、調査時期について、幼稚園での実習が終了した後の調査であったため、保育実習Ⅰでの経験や選択理由について、被調査者の記憶が変容している可能性が否定しきれない。こうした問題を解決するために、保育実習Ⅰの終了後や、選択必修の保育実習の選択時など、縦断的に調査を行うことが望ましいと考えられる。

また、保育実習Ⅲや保育実習Ⅳの選択が幼稚園実習に影響を与えているという研究結果が得られたとしても、その結果を踏まえて教育的な介入を行った場合の効果までは検討しきれていない。そのため、介入を行った場合の効果についても検討していく必要があろう。

最後に、保育・幼児教育現場に就職した時の影響について、幼稚園実習効力感の高さは、実際に就職して保育・幼児教育現場に入る際の自信やパフォーマンスと関連していることが考えられる。ただし、施設での実習による幅広い経験がポジティブに影響する可能性も大いに考えられる。その点については今回の研究では明らかにできていないため、今後の研究によって明らかにされることが待たれる。

【参考文献】

Bandura, A. (1977) Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. Psychological Review, **84**, Pp.191-215.

厚生労働省（2013）「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」雇児発 0808 第 2 号（平成 25 年 8 月 8 日）、
<http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/hoiku/dl/tokurei3-2.pdf>（2014.11.10）

三木知子・桜井茂男（1998）「保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響」『教育心理学研究』**46**, Pp.203-211.

小薗江幸子（2009）「保育実習自己効力感尺度作成の試み」『淑徳短期大学研究紀要』**48**, Pp.123-135.

小薗江幸子（2014）「保育実習が学生の自己効力感に与える影響―実習回数の違いによる自己効力感の特徴―」『淑徳短期大学研究紀要』**53**, Pp. 97-112.

A Study of Effects the Experience of Childcare Practice on Learning from the Teaching Practice

Yoshihiro Oouchi

Abstract

This study discusses the influence by the experience of childcare practice on the learning from the teaching practice. Especially, this study consider how students select childcare practice III(practice in childcare center) or childcare practice IV(practice in child welfare facility except childcare center) as selectable required childcare practice ,and how the selection differentiates the experience of teaching practice.

The results showed that students select childcare practice III seek jobs such as childcare center or kindergarten, and have a positive experience in childcare practice I as first practice in childcare center. The results also showed that the experience of childcare practice III effects positively on the learning from the teaching practice such as preparing and responsible practice, and increase students' self-efficacy for the teaching practice. Finally, how students and teachers should consider about selectable required childcare practice was discussed.

Key word: childcare practice, teaching practice, select childcare practice as selectable required, self-efficacy for the teaching practice